

創業の目標と精神

1946〔昭和 21〕年～1956〔昭和 31〕年



- ◆ 新日本印刷株式会社を創立（1946）
- ◆ 日立製作所より雑誌輪転機を購入し、本社工場に据付けて稼働開始（1951）
- ◆ (株) 日刊工業新聞社に出版局創立され、受注急増（1951）
- ◆ (株) 日刊工業新聞社発行の全国工場通覧（昭和 27 年度版、以後隔年刊行）を印刷納本（1951）
- ◆ 鋳造部門を（株）日刊工業新聞社に移管（1951）
- ◆ 市ヶ谷工場にて活版印刷機稼働（1952）
- ◆ 市ヶ谷工場新館（事務所・第 2 号整版工場）を新築完工（1953）
- ◆ 浅間観光（株）名儀の建物所有権（新宿区市ヶ谷）を当社に移転（1953）
- ◆ 市ヶ谷工場に原稿倉庫を建設（1956）
- ◆ 創立満 10 周年記念式典（1956）

創業時代—活版 6 台、平版 5 台

1945（昭和 20）年の終戦後、残された国土に見るべき資源のない日本が、自立していくためにはまず工業を再建するとともに、発展させて、貿易の振興を図る以外に道はない。そのためには、「かつて、工業立国の旗印のもとに同志が結集した日刊工業新聞を復刊しよう」と、増田顕邦社長は決意した。

新聞復刊は急速に具体化し、終戦 1 ヶ月後の 9 月 15 日付をもって、まず「工業新聞」の題字のもとに復刊第 1 号を発行した。

そして、翌年の 1946（昭和 21）年 7 月 18 日「新日本印刷株式会社」を正式に登録し、ここに株式会社として創業したのである。会社は資本金 741,500 円、従業員約 125 名、本社は東京都千代田区飯田町 1-1（日



復刊翌年に完成した日刊工業新聞社屋。新日本印刷もここからスタートした

刊工業新聞旧本社の九段下)、活版工場は東京都練馬区南町1-3532, 平版工場は隣接の同1-3553に位置した。

活版工場は敷地 851㎡ (258 坪), 木造モルタル塗り 2 階建延 1,320㎡ (400 坪), また平版工場は敷地 1,089㎡ (330 坪), 建築面積は一部 2 階建を含み延 726㎡ (220 坪) である。

当時は活版印刷機械 6 台, 平版印刷機械 5 台といった町工場的な存在であつたが, ここに装いも新たな「新日本印刷株式会社」が動き始めたのである。

新たなスタートを切るに当たって, 増田社長は全従業員を一堂に集め, 率直に現在の心境を吐露したのち, 「今日より自分についてこられるものは社に残って働いてくれ。もし不服なものは今日限り去っていても構わない」と告げたと。いわば背水の陣, 全員必死の健闘なくしての発展は望めない。目的を同じくする者同志の結合が最も大切なことは自明である。もちろん社を去るものは 1 人もいなかった。

工場の朝は刷本の積み出しから始まり, 工場長を陣頭に事務系従業員が総出で馬車に刷本積み当たった。

印刷物は農園分野, 科学分野, 野球少年などに関する雑誌で, とくに野球少年の下版となると徹夜作業のため, 印刷場に緊張感が漲った。「何折目は倍掛け, 何折目は日数がないから 4 倍掛け」といった命令口調の作業指示の声が飛び交う。

一晩中, 機械は回り通して, 夜中におにぎりを頬ばったり, 雑炊やさつま芋で空腹を満たした。当時は人員が不足し, また印刷資材が乏しいうえに, 電力事情もひどく悪かった。昼夜の別なく作業し, 1 日おきの徹

夜もしばらく続いた。あるときはアラビヤゴムの代わりに, 食用のコンニャクを潰して水で溶解し, この糊を使ったこともあった。この代用糊は, かつて日本軍の風船爆弾製造にも接着剤として使われた技術と言われている。

寒い夜に, 暖房用に燃やす燃料がないときは, 木の枝を払って松葉を燃やしたりした。木の枝はすぐ燃え尽き, かじかむ手をこすりながら仕事を続け, 作業は翌日までぶっ通しで働いた。

平版工場には平版写真部があつたが, 活版専用の凸版製版を主体に, 平版は二次的存在の仕事をしており, 名称も増田写真製版所として独立していた。もとは唐傘工場を改造したもので, 仕事場は日本間そのものなので, 静かに歩かないと“カメラ振れ”する状態だった。また, 冬場は水道や薬品が凍りついてしまい, 朝一番の仕事は凍った薬品を溶かすことから始まった。設備は木製四ツ切りカメラ 1 台, 足踏み式真空焼枠 1 台だけであつた。

しかし, 従業員の意気は盛んで, 相当量の仕事をこなしていた。終戦直後の混乱期の中で, 工場内は次第に活況を呈していった。

1949 (昭和 24) 年度のわが国鋳工業生産は, 前年に比べて 2 割増となったが, 需要がこれに追いつかなかったため滞貨が激増した。とくに中小企業の資金繰りは深刻になり, せっかく復興期にさしかかっていたにもかかわらず, 企業の倒産や整理が続出し甚に失業者が増えた。



増田顕邦社長

平版、活版の設備拡大

こうした経済環境の中で、新日本印刷も幾多の苦難に直面しつつあった。しかし、“拡充を知って縮小を好まない”増田社長の性格から、将来の布石を含めて着々と設備の拡充を続けたことにより、業績は1946（昭和21）年の513万円、1947（昭和22）年の1,481万円、1948（昭和23）年の3,332万円、1949（昭和24）年の4,680万円と年々倍増の勢いであった。しかも、新鋭機械の導入にはきわめて意欲的で、日立精機や小森印刷機械の首脳が、新たに完成した機械の話を持ち込むと、増田社長は「よし、私が買いましょう」と即決した。そのため、日立精機の雑誌輪転機第1号機、

2回転印刷機1号、2号機、また小森印刷機械のオフセット印刷機1号、2号機ともすべて新日本印刷の購入機械となった。

増田社長はまた、従業員に夢を持たせるのが上手で、「後楽園のサッカー場跡地を買収し、将来そこに輪転機を入れて“一大印刷工場”をつくるのだから、しっかりやれ」などと皆を楽しませたりしている。従業員の慰安にも力を入れ、芸能人を連れてきては工場に仮設舞台をつくり、観賞することもしばしばだった。そのたびに、貴重な米国製キャンデーを皆に配り分けるなど、思いやりも深かった。

こうして、創立後5～6年の間に、活版印刷機10台、雑誌輪転機1台、平版印刷機6台となり、その他の施設においても著しく改善・整備が行われ、従業員も約2倍の260名にもなった。

活版工場では、1949（昭和24）年3月には当時最も進歩した活版印刷機械であった日立式菊全判2回転印刷機を増設したのははじめ、翌1950（昭和25）年4月には岩田テープ式菊半裁、同年10月と1951（昭和26）年2月にはそれぞれ日立式四六全判印刷機を設置している。同時に工場の増築を行い、さらに耐震耐火構造の紙型倉庫を新築した。

いっぽう、平版工場でも創立当時5台の印刷機と40余名の従業員とで発足しているが、以来、設備の拡充・最新化が進んだ。1948（昭和23）年7月には清水機械の四六半裁、1950（昭和25）年3月には篠原機械の菊全判、1951（昭和26）年8月には浜田精機の四六半裁を設備した。

さらに印刷機械の自家修理を目的として、1949（昭

和 24) 年 3 月に開設された機械工場(当時練馬区南町)は小規模なものであったが、印刷部門の設備充実に伴って次第に繁忙となった。このため、1950(昭和 25) 年 11 月に新宿区下落合 1-67 に移転し、新工場は敷地 1,152 m² (349 坪) という広大なもので、印刷機械の修理だけでは余裕がありすぎるため、一般機械の製作にも着手した。その後 1953(昭和 28) 年 1 月からは東京重機工業株式会社のジューキシンの組み立てを開始する。

1951(昭和 26) 年 5 月には平版工場に紙乾燥場を新設、80 連の能力を持つ近代的な設備として注目された。

工場火災から市ヶ谷へ

しかし、順風満帆ともいえるこれまでの経営に、過酷な試練が始まる。

1951(昭和 26) 年 11 月 11 日、日刊工業新聞社の本社社屋が炎上したのに続いて、翌 1952(昭和 27) 年 9 月 2 日に新日本印刷の全生産高の 3 分の 2 以上を受け持っていた活版工場から出火、工場 4 棟は全焼したのである。

焼失したその夜のうちに、新日本印刷の役員を自宅に招集し、ただちに本社所在地であった市ヶ谷(東京都新宿区市ヶ谷本村町 27) に工場移転を指示した。当時この場所は、系列の浅間観光株式会社がホテルを経営する予定で、990m² (300 坪) の土地に鉄筋コンクリート建延 594m² (180 坪) のビルの改装工事を進めていたが、これを借用して印刷工場に再改造するこ



火事の焼跡整理の先頭に立つ増田創業社長

とに決めたのである。

増田社長自ら再建の最高指揮者となり、新工場の建築に、印刷機械の発注に、あるいは焼け跡の整理に先頭に立って働いた。

全社あげての深夜作業、徹夜の連続であったが、社員は残業代を辞退して懸命にこの仕事に取り組んだ。当時定期刊行物の印刷を相当量抱え、そのほとんどの得意先は去ることはしなかった。

また大宮鉄工所などが、印刷機械などの修理を 1 週間で行ってくれたことも強力な支援であった。しかも罹災後は、職人氣質の従業員たちはだれも会社を辞めようとせず、ひたすら自分の職場を守り抜いた。これらが再建を早めた大きな要因でもあった。

全従業員が再建に一致協力し、ただの 1 本の活字もなかった状況から、わずか 1 週間で操業を再開し、印刷業務を始めることができた。焼けた機械も使用可能なものは修理するとともに、日立式四六全判 2 回転印

刷機を2台新たに購入した。翌1953（昭和28）年1月には、2階建の市ヶ谷工場新館が完成し、ようやく復興の強力な歩みが始まろうとしたのである。しかし、2年後には再び平版工場の紙倉庫が焼失した。

このように相次ぐ災害にも、増田社長は強靱な精神で立ち向かった。これより先、1951（昭和26）年10月23日に郷里で兄を失い、さらにその月の30日には藤枝夫人を亡くすなど、心身ともに疲労の極にあったにもかかわらず、胸中の苦衷は少しも見せなかった。

日本経済は、1955（昭和30）年ごろには戦前の水準を回復していた。戦後の復興を完了したわが国は、これから技術革新によって設備の近代化を進めて経済成長が支えられる時代を迎えていたのである。そして技術革新は広い経済的影響力を持ち、経済の近代化を促進する原動力となるとみられた。

「もはや戦後ではない」というキャッチフレーズをうたった経済白書が出たのも、この頃である。今後の成長は近代化によって促進される。印刷業界もその例外ではなかった。

市ヶ谷工場の増設

新日本印刷市ヶ谷工場は、増田社長の設備拡充・効率化と作業環境整備の方針に沿って、着々と増設を進めていった。当時は工場3階建1棟、事務所・工場2



市ヶ谷工場全景

階建1棟、全館合わせても1,036㎡（314坪）ほどのささやかなものだったが、設備面では1954（昭和29）年6月には岩田式テープ四六全判が入るなど、11台のうち2台を除けば全部創立当時の機械は最新鋭化された。

拡大基調にあって、従業員数も市ヶ谷移転当時は121名だったが、1956（昭和31）年4月末には215名となり創立当時の2倍強と増強された。

新日本印刷はその後着実に発展し、印刷界に一応の基盤を築くことができた。

昭和31年には、銀座の山葉（現ヤマハ）ホールで創立満10周年の記念式典を盛大に挙行了した。

Column

創業前史

3つの印刷会社を買収合併

新日本印刷の前身は、1944（昭和19）年10月に設立した「軍事工業株式会社」の工場として有限会社改洋社（理化学研究所の平野博士が昭和15年設立）、株式会社日本印刷局（昭和9年元内閣印刷局小林浩斉技手が創業）、それに伝統のある二葉印刷株式会社の3社を買収合併して発足した。

翌1945（昭和20）年に入ると、太平洋戦争の局面は日を追って激烈となり、本拠地の東京・九段一帯も同年5月25日、B29の大空襲を受け、焼け野原になってしまった。この空襲とそれ以前の3月10日の空襲で、軍事工業の本社をはじめ旧二葉印刷の社屋・工場、旧改洋社の社屋・工場は焼失し、軍事工業の印刷工場としては旧日本印刷局の社屋・工場を残すだけであった。

増田社長は焼失を免れていた飯田橋駅近くの雄山閣のビルの一室に、軍事工業新聞と軍事工業の本拠を移し、新聞を旧日本印刷局の工場で1回も休刊することなく印刷して、発行を続けた。

しかし、その年の1945（昭和20）年8月15日、太平洋戦争は終結し、軍事工業新聞と軍事工業の印刷工場は、その本来の目的を失って終わりを告げたのである。

焼け跡からの再建

増田社長はこの悲運に敗けなかった。ただちに工業新聞の復刊を決意するとともに、印刷会社は一般の印刷業務に目的を変更して、焼け残った旧日本印刷局の社屋・工場を活用し業務再開に踏み切ったのである。

当時、印刷業界は壊滅状態にあったため、印刷物の注文が殺到した。用紙は増田社長の努力で確保でき、また旧改洋社の活字、地金、母型などを罹災前に疎開してあったことも幸いして、作業は順調に進んだ。

平版は、幸いにも旧江古田工場の場所に唐傘製造工場があり、これを入手することができた。ここに拠点ができ、印刷機を音羽護国寺前の丹野印刷所から菊全判機1台とB半裁機1台を購入し、これを据え付けてその年の10月初

旬から作業を開始した。

だが工場といっても、民家を増築した家屋で、古ぼけたきわめて粗末なものであった。印刷機のそばの壁に水棒が数本立てかけてあるだけで、工場内は雑然としていた。工場の周囲は麦畑で工場内の防空壕もそのまま、旋盤や丸太、角棒などから機械の部品までが散乱していた。

40人ほどの従業員は、戦時中の防空頭巾を寒さ対策の“防寒頭巾”にしたり、救急袋を雑のう（肩から掛ける布製のかばん）代わりにして出勤した。

平版工場の礎築く

機械の整備は満足とはいえないものの、印刷工場としてのフル稼働の域に達することができた。1945（昭和20）年の年の瀬も迫った12月27日、試運転の日を迎えた。刷版に「祝新日本印刷」と書いた初刷に成功し、長い間の苦労も笑顔に変わった。各自手持ちの湯呑に酒を注ぎ、焼イカをさかんに祝杯を上げて前途を心から祝った。

明けて1946（昭和21）年の初冬、すなわち新日本印刷として正式に登録を完了しスタートした直後のことである。当時商工省（現在の経済産業省）の調査課長だった岩武照彦氏（のち神戸製鋼常務・元中小企業庁長官）は、GHQから隠匿物資の調査を命ぜられた。期限は1ヵ月以内、調査票は新聞紙2ページ大、150万部であった。そのころは日刊紙すら4ページ建てになるかならないかのときで、さて調査票をどこで印刷するか段になって困った。新聞社の輪転機しか利用できないのに、これは司令部が嫌だった。

商工省の岩武課長はやっと日刊工業新聞社（当時工業新聞社）の系列に、新日本印刷があるのを知り「紙代だけでほとんど印刷費が出ない値段で刷ってもらえるだろうかと頼んできた。増田社長は二つ返事で承知した。やっとグラブリができてありがた、GHQの係官に提出して了解をとった。

商工省の工場統計表その他の統計資料が、他省に先がけて早く復活し、また生産動態統計その他の統計資料が整備したのも、増田社長の献身に負うところが多いと言われた。

創業 ▶ 10 周年

1946〔昭和 21〕年～1956〔昭和 31〕年

	当社の歩み	国・内外の動きなど
1946 昭和 21 年	7・18 新日本印刷株式会社を創立 資本金 741,500 円、社長・増田顕邦、本社・東京都千代田区飯田橋 1 丁目 1 番地、工場・東京都練馬区練馬南町 1 丁目 3532 番地、従業員 125 名 (株)養賢堂発行の「農業および園芸」、(社)日本化学会発行の「日本化学会誌」、(社)日本農芸化学会発行の「日本農芸化学会誌」の 3 月刊誌は創立以前にすでに印刷を手がけていた 12・― (株)養賢堂より月刊誌「畜産の研究」創刊され、印刷を始める	1・1 天皇、人間宣言（神格否定の詔勅） 1・4 GHQ、軍国主義者の公職追放・超国家主義団体の解散を指令 4・10 初の女性参政権による総選挙 5・1 メーデー、11 年ぶりに復活 5・22 第 1 次吉田 茂内閣成立 11・3 日本国憲法公布 12・21 北海道大地震、津波も発生、死者約 1,300 人
1947 昭和 22 年	8・― (社)日本造船学会発行の「日本造船学会論文集」（当時は造船協会誌）の印刷を始める	1・31 GHQ、2・1 ゼネスト中止命令 4・1 6・3・3 制教育の実施 5・3 日本国憲法施行、最高裁判所発足 5・24 片山 哲内閣成立 8・9 古橋広之進、400m 自由形に世界新記録を出す 9・15 関東大水害（キャスリン台風、17 日利根川水域大洪水）
1948 昭和 23 年	2・― (社)日本化学会発行の月刊誌「化学と工業」の印刷を始める 9・― (財)日本醸造協会発行の月刊誌「日本醸造協会誌」の印刷を始める	3・10 民・社・国協連立の芦田 均内閣成立 6・28 福井大震災、死者 3,769 人 7・20 国民祝日決定 9・15 アイオン台風上陸、東北・関東の死者・行方不明 2,368 人 10・15 第 2 次吉田民主自由党内閣成立 11・12 極東国際軍事裁判判決（東条ら 7 人絞首刑、木戸ら 16 人終身禁固） 12・15 年賀郵便復活
1949 昭和 24 年	4・1 就業規則を制定実施 6・― (株)養賢堂より月刊誌「機械の研究」創刊され、印刷を始める 12・― 東京都練馬区練馬南町 2 丁目の土地 320 坪を買収し、石造り紙型倉庫を建築	1・26 法隆寺金堂壁画焼失 4・25 1 ドル 360 円の単一為替レート実施 5・25 通商産業省発足（貿易庁解体） 8・31 キティ台風、京浜地区を直撃 10・1 中華人民共和国成立、主席・毛沢東 11・3 湯川秀樹理博へノーベル賞授与と発表
1950 昭和 25 年	2・27 (株)工業新聞社の定款が変更され、(株)日刊工業新聞社と改称 9・― 日本土壤肥料学会より季刊誌「日本土壤肥料学雑誌」創刊され、(株)養賢堂より受注して、印刷を始める	1・1 年齢を満でかぞえることを実施 1・7 1,000 円札を発行 6・25 朝鮮戦争突発、北朝鮮、韓国と 38 度線付近で戦闘開始 7・2 金閣寺放火のため炎上 7・17 株式市場、未曾有の大盛況（特需景気）

印刷の歴史		
BC25000	前 25000 年頃	フランス南西部のロセルで石灰岩に男女像の浮き彫りが描かれる（世界最古の浮き彫り）
BC35000	前 30000 年頃	メソポタミアで粘土板の本と図書館が作られる。円筒印・円筒版に模形文字
	前 2000 年中頃	フェニキア文字
	前 18 世紀	ハンムラビ王法典が制定される
BC1000	前 14 世紀頃	肢で甲骨文字（前 11 世紀）
	前 7 世紀頃	イタリア、26 文字のアルファベットが刻まれた象牙版「マルシニア・ダルベニア」
	前 4 世紀	アリストテレスが図書館「学園文庫」を設置

1951 昭和 26 年

当社の歩み

- 10・― 共立出版（株）発行の月刊誌「科学と実験」、（株）交通案内社発行の月刊誌「ポケット全国時刻表」の印刷を始める
- 4・5 日立製作所より雑誌輪転機を購入し、本社工場に据付けて稼働開始
- 5・― 5 月 15 日号より週刊読売（当時は月刊読売、昭和 27 年 7 月 13 日号より週刊読売となる）の印刷を始める
- 5・15 （株）日刊工業新聞社に出版局設立され、受注急増
- 5・― （財）発酵工業協会発行の月刊誌「発酵と工業」、（株）保健同人社発行の月刊誌「暮らしと健康」（当時は保健同人）、（社）色材協会発行の月刊誌「色材協会誌」の印刷を始める
- 8・― 日本育種学会より隔月刊誌「育種学雑誌」、園芸学会より「園芸学会誌」創刊され、（株）養賢堂より受注して、印刷を始める
- 11・11 本社社屋と本社工場を全焼。経理・雑誌輪転機・鋳造部門灰燼に帰す
- 11・22 （株）日刊工業新聞社発行の全国工場通覧（27 年度版、以後隔年刊行）を印刷納本
- 12・30 鋳造部門を（株）日刊工業新聞社に移管。従業員 10 名も同時に移籍

1952 昭和 27 年

- 5・6 （株）日刊工業新聞社の社屋完工
- 6・28 盗難対策のため活版工場周囲に鉄条網柵を新設
- 9・2 活版工場（東京都練馬区練馬南町 1-3532）延 258 坪を全焼
- 9・3 浅間観光（株）所有の建物・土地（東京都新宿区市ヶ谷本村町 27）を借用、活版工場を移転
- 12・3 市ヶ谷工場にて活版印刷機稼働

1953 昭和 28 年

- 1・8 活版工場罹災再建の年頭にあたり、営業部門の刷新・組版部門の設備 50% 拡大・外注部門の強化を決定
- 1・14 市ヶ谷工場に鉛版室を新築完工
- 2・4 市ヶ谷工場新館（事務所・第 2 号整版工場）を新築完工
- 3・9 浅間観光（株）名義の建物所有権（東京都新宿区市ヶ谷本村町 26-2・27-1 にまたがる 3 階建 1 棟、建坪延 180 坪）を当社に移転
- 5・20 大阪の新日本印刷（有）を買収して大阪支店（大阪市北区芝田町 65）を設立

国・内外の動きなど

- 9・3 ジェーン台風、近畿を縦断
- 2・27 国勢調査による日本人口 8,320 万人と発表
- 3・21 松竹「カルメン故郷に帰る」封切、日本最初の総天然色映画
- 4・1 米屋の民営復活
- 4・11 連合軍最高司令官マッカーサー罷免、後任にリッジウェイ中将
- 5・17 皇太后崩御（ご追号は貞明皇后）
- 7・30 繊維暴落、恐慌相場
- 9・1 民間放送はじまる
- 9・8 対日講和条約・日米安全保障条約調印
- 10・14 ルース台風襲来、全国に大被害、死者・行方不明 1,200 人
この年、「老兵は死なず」「社用族」「BG」「逆コース」「ノーコメント」「タレント」が流行語
- 2・28 日米行政協定調印
- 4・10 NHK「君の名は」放送開始
- 4・28 対日講和・安保両条約発効、GHQ 廃止
- 7・1 住民登録実施
- 9・15 第 1 回印刷文化典ひらかれる（以後毎年開催）
- 11・10 皇太子明仁親王、立太子礼
- 11・15 文学全集ブームはじまる
- 1・4 秩父宮雍仁親王ご死去
- 1・20 アイゼンハワー米大統領就任
- 2・1 NHK 東京テレビ、本放送を開始
- 3・5 ソ連首相スターリン死去、後任マレンコフ。株価大暴落（スターリン暴落）
- 7・27 朝鮮休戦協定調印
- 8・1 中小企業安定法、国会で成立。印刷業も指定業種となる
- 8・28 民間テレビ放送はじまる
- 9・1 独占禁止法改正法施行、不況カルテル・合理化カルテルを容認

1～5 世紀

- 前 305 アレクサンドリア図書館建設（前 2 世紀頃にはパピルス巻物の蔵書 70 万巻）
- 前 200 漢で紙の原型が出現する

- 105 後漢、蔡倫が書写材料としての製紙技術を改良
- 285 日本に漢字と墨の製法および紙が伝わる
- 330 コンスタンチヌス帝がコンスタンチノーブルに帝国図書館を建設

6 世紀

- ― 隋、木版印刷の発明
- 529 ユスティニアヌス 1 世が法学者ウルピアヌスらに「ローマ法大全」を編纂させる
- 594 隋、費長房の「歴代三宝記」に初めて印刷に関する記述が現れる

	当社の歩み	国・内外の動きなど
1954 昭和 29 年	6・25 (株) 日刊工業新聞社より月刊誌「機械技術」創刊され、印刷を始める 8・1 資本金を 2,966,000 円とする 8・15 (株) 日刊工業新聞社より月刊誌「マテリアル」(昭和 30 年 12 月号より「工業材料」と改題) 創刊され、印刷を始める 8・— 日本学校農業クラブ連盟事務局発行の月刊誌「リーダーシップ」の印刷を始める 10・— (財) 家庭クラブより月刊誌「FHJ」創刊され、印刷を始める	12・25 奄美群島返還の日米協定調印
	3・3 電力制限解除、休日を毎日曜日に戻す 3・— 日本化学療法学会発行の月刊誌「CHEMOTHERAPY」の印刷を始める 9・16 営業部門に新規開拓賞制度を実施 12・20 (株) 日刊工業新聞社より月刊誌「工場管理」創刊され、印刷を始める	1・1 50 銭以下の小銭廃止 3・1 ピキコでの米水爆実験で「第 5 福竜丸」被災 3・8 日米相互防衛援助協定 (MSA) 調印 4・— 映画「ローマの休日」の大ヒットでヘップバーン刈り流行 7・1 防衛庁設置、陸海空自衛隊発足 9・26 青函連絡船「洞爺丸」が沈没、死者・行方不明 1,175 人(わが国最大の海難事件) 12・10 鳩山一郎内閣成立 この年、電気洗濯機急速に普及
1955 昭和 30 年	1・5 組版奨励金制度を実施 1・30 江古田紙倉庫全焼 2・25 市ヶ谷工場第 1 号館の組版作業場を拡大 3・10 (株) 日刊工業新聞社より月刊誌「原子力工業」創刊され、印刷を始める 4・1 定期昇給制度を確立 10・31 大阪支店を廃止	2・8 マレンコフ・ソ連首相辞任、後任にブルガーニン就任 4・5 チャーチル英首相辞任、後任イーデン 5・4 日中貿易協定調印 5・— 「広辞苑」が出版され、「辞海」とともに新しい国語辞典の主流を占め、新書 ブームはじまる 7・— 東京の 7 月の平均気温、気象台開設以来の猛暑となる 11・15 保守合同、自由民主党発足 12・8 南極学術探検調査隊第 1 陣出発 この年、衣食足りて家庭電化普及がますます加速
	3・— 中央労働災害防止協会発行の月刊誌「安全」(当時は「安全ニュース」) の印刷を始める 3・16 市ヶ谷工場に原稿倉庫を建設 3・17 (株) 日刊工業新聞社より月刊誌「オートメーション」創刊され、印刷を始める 3・19 当社の機械修理部(東京都新宿区下落合 1-67) を分離し、新たに新日本機械工業株式会社を設立	2・19 「週刊新潮」創刊で、出版社系週刊誌ブームに口火 3・— 「主婦の友」B5 判に改装、婦人雑誌大型グラフ化の初め 4・28 万国著作権条約発効、書籍の奥付に著作権記号 (○の中に C) 登場 5・19 科学技術庁発足 10・15 佐久間ダム完成 10・19 日ソ国交回復 10・23 ハンガリー暴動

7 世紀	636 唐、中国文献記録上最初の木版印刷物とされる「女則」が印刷される 664 唐、世界最古の版「普賢菩薩像」が刻印される
8 世紀	712 古事記、大安万紀、語部稗田阿礼らによって選録される 720 日本書記、舎人親王により完成 740 木版の文字印刷始まる (中国)、日本や朝鮮で木版印刷が行われる 751 サラセン帝国に敗れた唐の捕虜が製紙法をイスラムに伝える 757 サマルカンドに初の製紙工場ができる — 韓国慶州仏国寺に「無垢浄光大陀羅尼經」が納められる (現存する最古の印刷物) 770 「百万塔陀羅尼」が印刷される (つくられた年代がわかっている最古の印刷物)

当社の歩み

- 5・18 創立満 10 周年記念式典（山葉ホール）
創立満 10 周年記念祝賀会（芝浦園）
- 7・— （社）日本潤滑学会発行の月刊誌「潤滑」を、（株）養賢堂より受注して、印刷を始める
- 8・11 旧（有）改洋社の土地 166 坪（豊島区巢鴨 1-3）を売却し、練馬区練馬南町に土地 532 坪を買収
- 12・25 資本金を 800 万円とする
- 12・30 市ヶ谷工場、紙倉庫・整版部門を拡充

国・内外の動きなど

- 10・29 スエズ動乱
- 11・8 南極探検予備観測船「宗谷」東京出港
- 12・18 国連、日本の加盟承認
- 12・23 石橋湛山内閣成立
この年、神武景気で設備投資ブーム。「マネービル」「三種の神器」「エレガント」「ケセラセラ」「一億総白痴化時代」「書きますわよ」が流行語

9 世紀

- 806 唐、竹を原料として紙をつくる
- 868 唐、「金剛般若波羅蜜經（金剛經）」が刷られる（現存する最古の卷子本）

10 世紀

- 950 蜀で「大蔵經」が印刷される
- 960 エジプトに製紙技術が伝わる
- 宋で羅針盤と火薬が発明され、木版印刷が普及する

11 世紀

- 北宋、沈倍が「夢溪筆談」技芸篇で「印刷」という言葉を初めて使う
- 1100 モロッコ、フェスに製紙技術が伝わるテオフィルスがインク製法をまとめた「さまざまの技法について」を著す
テオフィルスがインク製法をまとめた「さまざまの技法について」を著す